

都市＝二次的定住・論

若林 幹夫

「都市」とは何か。都市社会学と呼ばれる伝統的な研究分野の存在にもかかわらず、社会学的対象としての「都市」の理論的位置づけの試みには、見るべきものが少ない。本稿では、都市社会学とは異なる視点からこの問いに答え、社会的存在としての「都市」に適切な理論的位置を与えることを試みよう。

「都市」に固有の社会性は、それが定住的な社会であり、かつ「農村」や「共同体」と呼ばれる定住に対するある種の「否定性」として現象する定住である点にある。本稿は、ヴェーバーやマルクス、ポランニー等の理論の「批評」を通じてこのことを明らかにし、さらに、「二次的定住」という概念を導入することにより、それに一般的な表現を与えることを試みる。

I. 規範としての都市、逸脱としての都市

【1】イタロ・カルヴィーノは『見えない都市』（邦訳題名『マルコ・ポーロの見えない都市』、Calvino [1972=1977]）で、元帝国の皇帝フビライ汗とその宮廷に寄るヴェネチアの商人マルコ・ポーロの口を借り、「都市」という存在をめぐる様々な「語り」と「沈黙」を描き出した。次の一節で始まる挿話は、そこでの皇帝とヴェネチア商人の間に存在する「ズレ」が、「都市」と呼ばれる存在の持つ社会性に関する一つの直観的な洞察を示しているという点で、とりわけ印象深いものの一つである。

「これからは、朕が諸国の都の有様を語ってみせることとしよう」と、汗は言ったものだった。「そちはそのような都が存在するか、旅をして確かめるのだ。」

しかしマルコ・ポーロの訪れた諸都市は、いつも皇帝の考えだした都市とは違っていた。(Calvino [1972=1977:94])

皇帝フビライの語るところによれば、彼が心中に思い描いた都市には「基準に応じるいっさいのものが含まれて」おり、「実在する都市が程度の差こそさまざまであれ、この基準から離れてゆくものである以上」、「その例外を予見し、そのもっとも蓋然性の高い組合せを計算するだけで」、「そこから可能なかぎりのさまざまな都会を演繹できる都市の雛型」であるという。

それに対してマルコ・ポーロは、「私が考えましたのも、やはり都市の雛型であり、それから他のいっさいの都市を演繹いたしておるのでございます」と述べる。「それはただ例外、禁止事項、矛盾、撞着、非条理のみによってできあがった都市」であり、「この雛型から例外的なものを取りさってゆくだけで」、「例外としてのみ存在する都市のいずれかに必ず到達することができる」のだという。

皇帝フビライにとって、「都市」とは一つの規範である。それは何よりも「基準」であり、現実の都市はそのような規範と、そこからの一定程度の逸脱として存在する。それに対して、商人マルコにとって、「都市」とは本質的に逸脱あるいは例外であり、都市の実在する蓋然性

は、その逸脱に対する（逸脱からの）一定程度の逸脱・例外として存在する。皇帝フビライは「規範としての都市」を夢想し、商人マルコは「逸脱としての都市」を心に抱く。

【2】上述の挿話においてフビライとマルコの間¹に存在するズレ（不一致）は、社会的事実としての都市がもつ規則性・規格性と、現象として存在する都市がそれに対してもつ逸脱性との間のズレと見ることが出来るだろう。なるほど全ての都市は、社会的事実としての規則性・規格性と、それに対する逸脱性とを分かちもつものとしてわれわれの前に現れるのであり、このことは、「都市」と呼ばれる存在が自らのうちに不可避免的に孕む「社会性」に他ならない。このような読みは決して誤ってはいない。それは、むしろ「正解」と呼ばれるべきものだ。けれども、先の挿話で皇帝と商人の間に与えられたズレをそのような「相対的な差異」として読むとき、われわれは、そこに暗示されている都市という存在のもつもう一つの社会性への洞察、既に読み落としていると言うべきなのだ。

上述の解説においては、「逸脱としての都市」の逸脱性は、「規範としての都市」がもつ規則性・規格性に対する相対的な逸脱性・例外性として見出される。が、マルコ・ポーロの心中に存在した「雛型」である「逸脱としての都市」は、むしろそのような相対性に収まらぬ荒唐無稽な性能をもっている。何故なら、マルコの心中にあった都市の雛形は、現実にそのようなものを考えうるかをさしあたり問わないとするならば、全ての都市のもつ規則性・規格性がそこからの逸脱として演繹されうるような、「逸脱」の集合なのだから。このような荒唐無稽な〈逸脱〉は、特定の「規範」としての都市を前提とする相対的な「逸脱」ではなく、そのような「規範」に先行して存在する、より根源的な

〈逸脱〉である。解説のこの水準では、先の解説に見られた規範と逸脱との間の非対称性、規範は逸脱に論理的にも経験的にも先行するという非対象性は棄却され、反転してしまう。

【3】かくして『見えない都市』のこの挿話は、「都市」と呼ばれる存在に対して、次のような深度の異なった二重の洞察を示しているのだ¹。

- 1：現実²に存在する都市は、社会的事実として一つの「規範」であり、かつまたそこからの「逸脱」であるようなものとして存在する。
- 2：そのような「規範」としての都市と「逸脱」としての都市の存在以前に、都市とはそれらに先行する〈逸脱〉である。「規範」としての都市とは、そのような先行的な逸脱に対し、それを代補する規範性として現れるのであり、その意味で、「規範」としての都市は〈逸脱〉としての都市に対して相対的である。

都市は、常に・既に「～でないもの」として一つの〈逸脱〉であり、「規範」あるいは「逸脱」としての都市は、〈逸脱〉としての都市の後から、それがポジティブな事実性として代補される³ところにやってくる。私の考えでは、この挿話が暗示する洞察は、「都市」と呼ばれる存在の孕む社会性の本質的な部分⁴についている。そこで、このことを明らかにすることを、以下本稿の主題にしたいと思う。

II. マックス・ヴェーバー、『都市の類型学』

【1】都市が相対的な「規範」や「逸脱」に先行する一つの〈逸脱〉であるという時、では、それはどのような逸脱なのだろうか。

想定される常識的な解答は、「それは村落や共同体に対する逸脱である」というものだろう⁽²⁾。この答えは、とりあえず「正解」ではある。けれどもその正しさは、未だ単に、「都市とは村落や共同体ではない何物かである」という程度の形式的な正しさ（トートロジー）に過ぎない。重要なことは、「都市」と呼ばれる存在が村落や「共同体」に対してある種の「否定性」として現象することの社会性、都市が常に・既に一つの〈逸脱〉であること社会性を捉えることだ⁽³⁾。

では、都市が村落や「共同体」に対する否定性を孕んだ存在として自らを定礎するとは如何なることか。

【2】マックス・ヴェーバーの『都市の類型学』(Weber [1921 → 1956=1964]) の第一項「都市の概念と種類」は、諸社会で「語られるもの」としての「都市」と、それが言及する実定的な社会状態としての「都市」との間を往還する文体上の振幅が、「～でないもの」としての都市のもつ社会性をポジティブな社会科学的言説（＝「都市とは～である」）の限界として指示していると読みうる点で、ここでのわれわれにとってきわめて示唆的である。

「都市の概念と種類」の冒頭で、ヴェーバーは次のように述べている。

「都市」の定義は、われわれはこれをきわめて種々さまざまの仕方で試みることができる。

すべての都市に共通していることは、ただ次の一事にすぎない。すなわち、都市というものは、ともかく一つの（少なくとも相対的に）まとまった定住——一つの「^{オストツェット}聚落」——であり、一つまたは数々の散在的住居ではないということのみである。(Weber [19

ヴェーバーがここで述べているのは、「都市」の定義、即ち、種々の社会である種の社会状態に対してなされる「言及」としての「都市」が、きわめて種々様々である一方で、そのように言及される社会状態に共通するポジティブな事実性は、唯一それが「聚落」（「定住」）であることのみである、ということだ。われわれはここで、都市が、「聚落」と呼びうるような社会形式に対するある種の了解とともに立ち現れることを、理解することが出来るだろう。都市とは、ある社会で「都市」、あるいはそれと同義の言葉で呼ばれるところの、定住的な社会である⁽⁴⁾。けれども、どのような定住がそのように呼ばれるのか。

この後、「都市の概念と種類」は、ポジティブな言説が記述しうる社会的な標識——聚落の建築的形態や経済的、政治的、人口学的・社会学的な諸特徴——の列举とその限界の画定によって、そのような言説では捉え切れない都市の社会性の所在をなぞってゆくように、「～であるような聚落は『都市』と呼ばれる、けれども、それだけでは一つの聚落が『都市』と呼ばれるためには十分ではない」という、振幅をもつ言説を展開してゆく。われわれはそこから、ヴェーバーのポジティブな文体が捉えた「都市」のポジティブな標識と表裏をなす、「都市」の存立を支える社会的な機制や布置の構造を透かし見ることが出来るだろう。その手掛かりとして、先ず、ヴェーバーが「経済的意味における『都市』」と呼ぶ概念を取り上げよう。

【3】ヴェーバーの経済的意味での「都市」概念のキー・ワードは、「市場」、「交換」、そして「商工業」である。最も明確な形で述べられている部分をまとめるならば、それは次のよう

なものだ。経済的な意味における「都市」とは、その土地に定住している住民たちが、その日常的な需要の中の重要な部分をその地の市場（＝局地市場）で充足しているような定住である。この意味における都市は、すべて「市場聚落」であり、それはその住民の経済的中心として局地的市場をもち、都市民は彼らの経済の専門的生産物や消費需要をこの市場における相互交換的販売によって充足しており、また都市以外の住民も、経済的専門化の結果、工業製品や商業取引品に対する彼らの需要をこの市場でまかなっている（→ Weber [1921 → 1956=1964:6]）。

換言すれば、そこで定住する人々の生活上の必要が、「市場」における「交換」や「商工業」による財の生産・分配を通じて充足されている時、〈経済〉に関してある定住が「都市」と了解され、そのように呼ばれるのだ。ここでは、「市場」や「交換」「商工業」は、都市的な定住と非都市的な定住とを区別するポジティブな標識として機能しているが、われわれはそこに、そのような了解を支え、かつ「都市」と呼ばれる定住の存立を支える社会的な機制や布置をも、見ることが出来るように思われる。

ここでヴェーバーの次の記述は、注目に値する。

すなわち、〔一〕都市の局地的市場は、オイコスに対する一種の交換経済的対幅を形成しているということ。けだし、前者は、農業生産者・非農業生産者および定住商人相互間における、顧客関係と専門化された無資本小経営とを基礎とする交換を伴っているのに、オイコスの方は、計画的に賦課された労働と貢租との給付が従属的な経済体に対して専門的に割り当てられることと、ヘルの家における労働の集積や協業とに立脚しており、その内

部には交換が存在していない。〔二〕都市における交換＝生産関係の規制は、オイコスに統合された〔従属的〕諸経済体の諸給付の組織化に対して、対幅を形成する関係にあるということ（Weber [1921 → 1956=1964: 22-23]）

ここで述べられているのは、市場聚落としての都市における社会原理が、「交換」を基軸とすることにおいて、オイコス⁽⁶⁾ 的な原理の組織する社会的な閉域の対幅、すなわちその「外部」であるということだ。「都市」を経済的な意味で「オイコス」の「外部」とするこの「交換」、そしてそれが定在する場としての「市場」とそれに媒介された「商工業」とが、ヴェーバーの指摘するオイコスのみならず、広く「共同体」や「村落」として了解されるような社会的な閉域（＝「閉じた社会」）に対して異和的な作用、社会的な閉域を遠心化し、横断する作用を効果するような、「間共同体」的な機制であることを考えるならば、ここで「経済的な意味における『都市』」の含意するところは重要である。

【4】 「閉じた社会」と言ったが、いわゆる「共同体」や村落は、決して市場や交換、商工業と無縁の牧歌的な社会ではない。自らを一つの閉域として思念するような村落や「共同体」もまた、非常に原始的な段階から「外部」との交易や交換に依存しており、「閉じた社会」としての「共同体」的な社会というのは、いわば一つの理念化された自己了解——ないしは他者了解——である。何より、自らを一つの閉域（＝内部）とする自己同一性の了解自体、常に・既に、自らに対して異和的なもの（＝他者＝外部）の存在を先行的に前提し、それを参照することなしには有り得ない。この意味で「閉じた社会」としての「共同体」は、市場や交換、商

工業がもつ社会を遠心化し横断する運動と接触し、それを自らに対して異和的なものとして外在化する限りで「閉じている」のである。

マルクスが「商品交換は、共同体の終わるところに、すなわち、共同体が他の共同体または他の共同体の成員と接触する点にはじまる」(Marx[1867=1969:158])と述べ、ポランニーが「交易は、その集団にとって外部的な何かであって、それはわれわれが日常生活とはまったく別個のものだと考える活動、たとえば狩猟、遠征、海賊行為などに近いものである」(Polanyi [1977=1980:159])と述べたように、「市場」に集約化されて空間的な定在をみる「交換」は、自らを一つの閉域とする社会がその「外部」と関係する形式の一つである。「共同体」が自らの外部との間にもつこのような関係を、マルクス＝エンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』(Marx & Engels [1958=1965])で「交通 Verkehr」と呼んだ。商工業も、それが「共同体」の内部の自給経済的な技術——共同体内で抑制された交通——から、その外部との交易・交換(=交通)を前提として人々を組織するものへと展開する時、交通の領域に身体や財を接続する技術、「共同体」の外部との関係において身体・資産を布置・配列する技術となる筈である。実際『ドイツ・イデオロギー』でのマルクス＝エンゲルスにとって、農業生産からの商工業の分離や分業の展開は、それ自体社会的な交通の展開過程と見なされていた(→ Marx & Engels [1958=1965:44])。

かくして、ヴェーバーの言う経済的な意味での「都市」は、より根柢的な意味では、「共同体」的な閉域としての社会に対する「交通する外部」に在るものとして了解される定住である、ということが出来る。このことの含意は重要である。経済的な意味での「都市」は、「共同体」

がそれを「外部」とし、それを参照することを通じて自らを一つの閉域(=内部)としてきた空間に位置づく制度や技術、関係や身体を、中核的な社会原理や構成要素としてもつような定住、そのような外部を内部化したところにその存在を定礎する定住として見出されるのである。

【5】「……、都市とは、巨大な一体的定住を示すごとき聚落——ここに聚落^{オクトンヤフト}とは家と家とが密接しているような定住を云う——であり、したがって、そこには、都市以外の隣人^{ナハバールツニアベント}団体に特徴的な・住民相互の人的な相識関係が、欠けているということである。そうすると、比較的大きな聚落^{オクトンヤフト}のみが都市であるということになる。」(Weber [1921 → 1956=1964:4])というヴェーバーの言葉は、シカゴ派都市社会学の言う都市の「社会学的概念」——大量・高密度・高異質的な人口群としての「都市」——に比定しうる都市概念を指摘した部分として、時に引用される⁽⁶⁾。がしかし、ヴェーバーの「都市」概念の検討が、このような人口の状態としての「都市」よりも、むしろ上述の「経済」や後述する「政治」といった社会的機制に留目していることは、ヴェーバーの視点が既にシカゴ派的な「都市」概念を超えていたことを示している。おそらく重要なことは、都市が大量・高密度・高異質的な人口群であるということよりも、むしろそのような人口の状態として「都市」が現れてしまうことの社会科学的な意味であり、このような視点からする時、シカゴ派的な「都市」概念に比定されるこの記述の意味も変容する。

われわれの考えではヴェーバーのこの記述は、都市が上述のような意味で「共同体」の外部に成立する定住であることと対応している。そこが「共同体」の外部の定住であればこそ、定住する人々の間には、「共同体」的な社会の閉域

の内部にあっては自明であり、そこでの社会の存立を支えてもいる人々との相識関係が、徹底的に欠如しているのだ。「都市は、確かに、世界中どこにおいても、すぐれて、従来異郷者であったひとびとが^{ツゲミンゾー・ドルンク}集住したものであった」(Weber[1921 → 1956=1964:94])というヴェーバーの言葉は、このことと照合する。「都市」とは、相互に「他者」であるような人々よりなる定住なのである。

【6】さて、経済的な意味での「都市」概念と並んで「都市の概念と種類」でのヴェーバーの議論のもう一つの柱をなすのは、「政治的・行政的都市概念」である。「政治的・行政的都市概念」についてのヴェーバーの言明は、経済的概念に比べて一義的な明快さを欠いているが、われわれなりにまとめるならば、およそ次のようになるだろう。都市の政治的・行政的概念は、その経済的概念からはっきりと区別される。都市が特別の都市領域をもつということは、この政治的・行政的概念においてのみ言いうることであり、経済的には「都市」と呼びえないような定住も、この意味においては都市として通用する。このような都市が農村と異なる重要な点は、そこでの土地所有関係の規律が農村における土地所有制度とは異なっているということ、またそれと相関して、そこでの課税原理が農村のものとは異なっているということである。さらにまた、若干の例外——たとえば日本——を除いて、古代・中世において「都市」が特殊の要塞=衛戍地であったことは、政治的・行政的都市概念にとって決定的である。西欧中世の都市を特徴づける「ゲマインデ Gemeinde」⁽⁷⁾としての都市という性格も、この水準でのみ意味をもつ。(→ Weber [1921 → 1956=1964: 24-41])

都市の政治的・行政的概念の含意するところ

は、その経済的・社会学的概念の意味するところよりいささか微妙であるように思われる。が、これまでの考察をふまえるならば、これを次のように理解することが出来るだろう。ヴェーバーの「都市」の政治的・行政的概念は、その経済的及び社会学的概念が指示していた「共同体」に対する外部性としての都市が、土地制度や課税制度という政治的・行政的の制度、城壁をもつ要塞といった土木工学的技術に代補されることによってそれ自体一つの「内部」となる水準、換言すれば、〈逸脱〉としての都市が「規範」としての都市へと移行する水準に対応しているのではないかと。

『都市の類型学』全体の主題である「都市ゲマインデ」とは、〈逸脱〉としての都市を代補し、それを一つの「内部」とする可能な「手」の一つに他ならない。

【7】見てきたように、都市と村落や共同体の間には、自己同一性の存立をめぐる位相的な構造の反転(=外部の内部化)が存在する。「共同体」的な社会の存立をめぐる先に確認しておいたことによるならば、「共同体」の「外部」の存在は、その「内部」の存在に論理的に——そしておそらくは歴史的にも——先行する。外部を異和的なものとするので自らを閉域=内部とする「共同体」の規範は、それに先行する〈逸脱〉としての「交通する外部」を、常に・既に前提としているのだ。都市とは、そのような「交通する外部」を内部として自らを定礎するような定住である。「都市とは村落や共同体ではない何物かである」と言う時の否定=「ではない」の意味するところは、定住の社会的存立をめぐるこの位相的な反転なのだ。「都市」と呼ばれる定住のもつこのような格位は、先にカルヴィーノの『見えない都市』の一挿話の「先行的な〈逸脱〉としての都市」という洞察

と照合する。

がしかし、都市が定住として安定した存立を得るためには、そのような〈逸脱〉としての都市の外部性が制度・技術によって代補され、それ自体一つの内部性へと転換されなくてはならない。都市が政治的・行政的概念として、即ち〈政治〉や〈行政〉として言及される制度・技術に閑説して了解される時に見出されているのは、そのような転換の水準である。そしてこの水準は、都市が「規範」、あるいはそれに対する「逸脱」であるというカルヴィーノのもう一つの——深度の浅い——考察と照合している。

III. 都市の成立

【1】「共同体」的な社会は、通常その内部で社会的な交通の外部性が顕在化することを、様々な規範によって禁制している。「原始機械は、交換や商工業を知らないのではない。この機械は、これらのものを追い払い局地化して碁盤の枱目の枱にはめ込み、商人や鍛冶屋職人を従属的な地位におく」(Deleuze & Guattari[1972=1986:187]) のだ。都市が成立するとは、このような「共同体」の「碁盤の枱目」から流出(=〈逸脱〉)した身体や物財が、特定の土地空間に志向し、新たな関係性において定住として編成されるということである。けれども、そもそも「共同体」的な規範の閉域に内属していた身体や物財をして「交通する外部」の領域に流通せしめ、そこに都市的な定住を存立させる契機や機制は如何なるものか。

【2】ピエール・クラストルは、身体や物財が「共同体」的な規範から逃れ出る領域を可能にするものを、「人口」の領域に見ている。

……、少なくとも部分的には社会の統御をま

ぬがれると思われる領域——、社会が不完全な「コード化」しか行えない「流動」の領域がある。すなわち、人口動態の領域である。これは、文化の規則によって統御されると同時に自然の法則によっても統御され、社会的なものと同時に生物学的なものに根をおろす生命の展開する空間であり、恐らくは独自の力学によって機能し、したがって社会による支配の及ばないひとつの「機械」の場なのだ。(Clastres[1974=1987:264])

クラストルは、この「人口」の領域こそ「共同体」的な規範の組織化を免れる領域であり、部族的社会を超えて地域集団を統合する政治的権力が胚胎し、「国家なき社会」を「国家ある社会」へと移行させる変容が萌芽する領域であるという。クラストルはこの「人口」の領域に、社会を「共同体」的な閉域の外部へと開く契機を見ているのである。

『ドイツ・イデオロギー』でのマルクス＝エンゲルスもまた、議論としてはより展開され、表現としてはより暗示的な形で、同様のことを書き記している。

(人々の存在の仕方を規定する：引用者)
この生産は人口の増加とともにやっと始まる。人口の増加はそれはそれでまた諸個人相互間の交通を前提とする。この交通の形態はまた生産によって条件づけられている。(Marx & Engels [1958=1965:43])

ここでは、「生産—人口増加—交通」が相互に規定しあうトリアーデが示されている。これを、「技術—人口増加—交通」と言い換えてもよいだろう。「技術」とは、自然環境を含む物質的な世界と社会との関係を制御し、変形し、

代補し、移転可能にするような方法の体系である。農業、工業、商業といった「産業」は、ここで言うような技術が、制度と組み合わせられた社会的な体系に他ならない。マルクス＝エンゲルスのトリアーデは、人口の増加を契機として社会と物質世界との関係を代補する技術体系の変容（高度化）による生産の増加が始まること、この人口の増加は社会的交通の展開を前提とすること、そしてそのような社会的交通の形態は、社会的な技術体系に基礎づけられた生産によって再び規定されていることを、示している。ここでは、社会的交通の展開が、社会的な技術体系の変容と、それに相関する人口の増加とによって説明されているのだ。

ここに見出される「人口」は、種々の社会形式によって既に代補され、実定化された存在として都市空間の内部に見出されるシカゴ派都市社会学の「高異質的な人口」ではなく、それに先立つ社会の物質的な素材である身体群としての人口の領域である。

また技術や産業は、生産の形式を規定するのみならず、社会と土地との関係をも規定する。農業が自然環境を加工して新たな空間を形成し、商業が複数の土地の間の価格体系の差異をめぐって空間を横断し、工業が物質を自然環境から切断し、加工しつつ、自然環境から相対的に遊離した論理——資本制的な論理——によって土地空間を対象化して編成し、各々それらの空間の上に身体と物財とを配列するように、技術や産業は、社会と土地空間との間の生態的⁽⁸⁾な関係を代補し、変換する格位、ドゥルーズ＝ガタリの言葉を用いるならば、社会を「土地化」・「脱土地化」・「再土地化」するメディアの格位にあるのだ(Deleuze & Guattari[1972=1986])。

【3】マルクス＝エンゲルスやクラストルの指摘は、「共同体」的な社会の閉域が、小規模

な人口、低度の技術・生産水準によって、社会的交通の強度が低度に抑制されている場合のみ、安定的に存立可能であるという理論的な直観に支えられている。逆に言えば、「共同体」的な社会の存立を支える規範は、制御可能な閾域を超えた物質的な質料としての人口や、純粋な強度としての交通が、自らの内部に露呈しないように人口や制度・技術の布置を制御し、あるいは、そのような「過剰」を外部へと放り退けているのだ。したがって、何らかの理由で社会の技術体系が高度に変容し、あるいは人口規模が増加すれば、そこには「共同体」的な規範を超える交通の強度や、質料としての身体の領域が露呈してくる。このような身体や交通の強度の露呈こそ、われわれがこれまで〈逸脱〉と呼んできたところのものに他ならない。

このことは、社会的交通の領域へと身体や物財が流出し、それらの身体や物財を素材として、社会と空間の新たな関係の場としての都市が編成される契機が、社会的な技術体系の変容と人口の増加によって、「共同体」的な規範を超える質料的な過剰や強度が「外部」として露呈するところに胚胎することを示唆している。

都市が成立するためには、「共同体」がその「外部」に対してもっていた両義的な志向性——「外部」を前提とすることなしには「内部」たりえない——が反転し、この「外部」で交通する身体や物財が、特定の土地空間を遠心的＝求心的な中心として編成されるような、社会的な変容⁽⁹⁾が必要である。では、そのような変容は如何なる機制に支えられて可能となるのだろうか。

【4】ポランニーは、社会の統合形態としての土地と労働（＝身体と物財の協同連関過程）の配列について、次のように述べている。

……、統合についての支配的な形態にしたがって諸経済を分類することは、示唆するところが多い。……。われわれは、統合形態の支配が本質的に依拠する二要素——社会における土地と労働の役割に注意を向けるだけでよい。部族共同体は、親族の絆をつうじての土地および労働の経済への統合として特徴づけられる。封建社会においては、忠誠の絆が土地とそれに付随する労働の運命を決定する。治水帝国においては、土地は寺院や宮殿によって主に分配され(時に再分配された)。少なくともその従属的形態として、労働も同様であった。近代において、市場が経済のなかの支配的な力へと擡頭したことは、土地と食糧が交換をとおして移動し、労働が市場で売買されるべき商品に転じた度合に注目することによってたどることができる。(Polanyi [1977=1980:101])

「互酬 reciprocity」、「再分配 redistribution」、「交換 exchange」として知られる統合形態としての経済の三類型は、ここに示されるように、社会における土地・身体・物財の流通と配列の形態に対応している。これら統合形態の経済人類学的モデルは、社会空間の位相的な構造のモデルでもあるのである。

互酬は、社会的な交通を特定の範囲内に内閉し、そこに「共同体」的な閉域を構制する。これに対し再分配は、身体や物財の交通が、空間上のある点を志向して中心化されるところに成立する。再分配も、それにより「中心/周縁」構造をもつ一つの閉域を構成するが、その閉域は、首長制や王権制に典型化されるように、既に「共同体」的な閉域を越える外部性と垂直性を内包し、空間的にはより大域的な水準へと移行している。最後に、任意の二点間の相互的な

交通であり、それ自体としてはもはや如何なる領域化・属領化も含意しない交換は、それが社会の全域へと全般化する時には「内部/外部」という位相的な構造を無効化し、社会空間を均質化してしまう傾動をもっている。

互酬が「共同体」的な内部に身体や物財を内閉するのに対して、再分配と交換は、そのような閉域の外部での身体や物財の交通の回路を構制する。互酬、再分配、交換のこの位相的な特性は、「共同体」からの〈逸脱〉として露呈した身体や物財の領域を捉える機制が、再分配や交換としてモデル化出来るであろうこと、したがって「共同体」の外部の定住としての都市が成立するような社会空間の位相的な反転——外部の内部化——と、社会を編成する形式としての再分配および交換の間には、一定の有縁関係があるだろうことを示唆している。

【5】ポランニーが述べるように、互酬、再分配、交換はまた、社会と土地との関係の在り方にも関わっている。

互酬に基礎を置く「共同体」的な社会の閉域は、通常自らの内部をも物理的な空間の内部として設定する。ポランニーがある場所で、それを環状に並ぶ住居にたとえたように(→ Polanyi [1977=1980:93-94])、互酬は「共同体」的な社会を、物理的にも一つの閉域として構制するのだ。

これに対し、再分配や交換は、「共同体」的な空間の外部での身体や物財の交通を捉え、さらには「共同体」における身体、物財と土地の編成を脱コード化=脱土地化して、より大域的な運動においてそれらを再編成(=再土地化)しようとする傾動をもつ。

既に述べたように、再分配は、社会空間に「中心/周縁」化された構造をもたらすが、この構造は社会の物理的な空間構造にも投影され

る。「共同体」的な社会の外部は、そこでは大域的な社会を中心化する空間の位相として現れ、周縁化された農村や「共同体」から遊離した身体や物財の交通は、その中心たる場所へと集中する。このように社会空間を中心化する外部の位相である場に流入し集積する身体や物財が、制度・技術に代補され、その空間に関して配列されて定住化する時、そこに「都市」と呼びうる定住が成立するだろう。

再分配が社会的な外部を大域的に中心化するのに対し、交換は「共同体」的な社会の間を横断し、社会的な外部を偏心化する交通である。そのような交換は、しばしば特定の土地空間に志向して集約的におこなわれ、そこに見出される場所は「市」と呼ばれる。「市」が成立する時、「共同体」的な社会の閉域の外部にある身体や物財は、この「市」の空間に流入し、そこを通過し、あるいはそこに滞留する。このような社会空間を横断する「外部」の位相である場に流入し集積する身体や物財が制度・技術に代補され、特定の土地空間に関して定住化される時、そこにも「都市」と呼びうる定住が成立することになる筈だ。

再分配や交換といった「外部」の交換の回路が、特定の土地空間へと集約的に投射される時、そこに、社会的な「外部」を一つの「内部」とするような位相をもった場が現れる。社会空間を中心化する外部として現れる場の位相を〈都〉と、そして社会空間を横断する外部として現れる場の位相を〈市〉と呼ぶことにしよう。〈都〉とは、たとえば王国における王都のように、社会空間を再分配構造によって編成する機構の中心に位置する都市の存立を基底で支える位相であり、〈市〉とは、たとえばバザール都市のように、交易体系の結節として現れるような都市の存立の位相を基底で支える位相である。

【6】カルヴィーノの『見えない都市』の対話が、フビライ汗とマルコ・ポーロ、皇帝（=王）と商人との間に交わされていることは偶然ではない。

王と商人、それらはともに、「共同体」に対して外部的な社会的交通を媒介する身体である。「王」とは、社会空間を中心化する運動の中心に座する身体であり、「商人」とは、社会空間を偏心的に横断する身体と呼び名に他ならない。皇帝フビライは〈都〉としての都市に、商人マルコは〈市〉としての都市に照応している。

皇帝フビライにとって都市とは「規範」であり、商人マルコにとって都市とは「逸脱」、あるいは〈逸脱〉であった。われわれはいまや、このことの含意をより深く理解することが出来る。〈都〉を中心化する外部とし、社会空間を再分配的な機制によって組織する社会形式である国家とは、「共同体」的な社会の外部を再び一つの閉域として規範化するものに他ならない。ここに都市は、「外部」を再び一つの「内部」とするような運動を体現する空間なのだ。それに対して、そのような「内部」と「外部」を往還するところに現れる身体である商人達の空間である〈市〉は、たとえそれが一つの定住として規範化されたとしても、本質的にその外部へと開かれた空間、国家的な規範によっても完全には内部化されない空間である。その意味で、〈市〉とは、社会的交通を〈都〉に中心化する国家的な規範に対して「逸脱」的なノイズであり、あの先行的な〈逸脱〉に通底する都市の位相なのである⁽¹⁰⁾。

IV. 二次的定住

【1】以上の議論に、より一般的な表現を与えてみよう。

〈二次的定住 secondary settlement〉という概念を導入する。

この概念は、ここではとりあえずきわめて形式的な意味で導入される。さしあたってこの概念は、それによって指示される定住の社会状態が、〈一次的定住〉というその対概念によって指示される定住の社会状態との関係を文脈としてのみ、有意味なものとして了解されること、その定住の社会的な同一性が、それが〈一次的定住〉に対してもつ一定の否定性においてのみ有効であるということの意味している。

さて、これまでの議論をふまえるならば、都市とは、村落や「共同体」を一次的定住とする二次的定住である、ということになるだろう。既に見てきたように、都市とは、村落や「共同体」に対する〈逸脱〉として社会的交通の領域に現れた身体や物財が、特定の土地空間に関して「規範」化された内部となるところに成立する定住であった。この意味において、都市は村落や「共同体」を一次的定住とする二次的定住なのだ。二次的定住は、一次的定住の定住性をいったん否定した身体や物財が、制度や技術によって代補され、規範化されて再定住化したものであるという点で、まさに一次的定住の「否定の否定」に他ならない。われわれのここまでの議論は、二次的定住としての都市の同一性を支える、一次的定住と二次的定住の間の差異をめぐる社会科学的な探究であったのだと言うことが出来る。

【2】明らかなように、定住という社会状態は、「移動」と呼びうる社会状態に対する否定として定義される。人々や物財が特定の土地空間に固定的に志向せず移動するこのような状態を、われわれは既に「交通」という概念によって指示しておいた。

都市が、一次的定住の外部において定住の一

次性の「否定の否定」として現象することは、都市がそれ自体自らを一つの閉域として属領化し内部化する傾動をもつ一方で、常に・既に、一次的定住の外部たる社会的交通の領域に媒介された存在であること、それが特定の土地空間に関して身体や物財を配列させるものであると同時に、社会空間のより大域的な広がりに対して開かれた存在であることを含意している。都市＝二次的定住においては、定住という社会状態のもつ土地空間への志向性は、村落＝一次的定住が土地空間に対してもつような強度の志向性に対して屈折し、偏差をもち、どこか遠隔化されたものとなっている。

社会空間は、交通する外部を都市＝二次的定住によって内部化することで、その大域的な編成の様態を変容させ、規範的、位相的な両義性を内包する。社会は「都市のある社会」となることで、交通する外部を自らの内に取り込むことになるのである⁽¹¹⁾。

「都市という都市が変圧器だといってよい。すなわち都市は電圧＝緊張を増大させ、交換を促進し、人間生活をいつまでも攪拌してやまない」(Braudel [1979=1985:210])という指摘は、正鵠を射ている。都市とは、単に〈逸脱〉や「規範」であるのではなく、社会の大域的な布置編成の位相を変容させ、それを支える〈審級〉とともに見出される場所なのだ。

【3】そこに定住する人々が既に一次的な定住性から遊離しており、また都市が「もう一つの村落」ではない以上、都市＝二次的定住における身体や物財の配列の構造、および社会と土地との関係の構造は、一次的定住におけるそれとは質的に異なっている。一次的定住に由来する社会形式を部分として含む場合にも、都市は、常に・既にそれを超えた広がりと複雑性をもっている。都市の社会学的概念についてヴェーバー

が述べた「住民間の人的相識関係の欠如」は、都市が二次的定住であることの帰結の一つである。

都市＝二次的定住が安定した構造をもつ社会状態として存立するためには、その一次的定住に対する否定性＝外部性を代補する様々な制度や技術が新たに布置され、人々や物財を特定の土地空間に関して配列しなくてはならない。この点において、都市とはまさに社会的な規範の体系として現象する。「都市ができると同時に行政、警察、租税等々、約言すれば共同体組織、したがってまた政治一般がいやおうなしに必要である」(Marx & Engels [1958=1965:96]) という『ドイツ・イデオロギー』の言葉は、この間の事情を適切に表現している。ヴェーバーの「政治的・行政的都市概念」が示すように、「都市」という概念がしばしば政治的・行政的な社会形象に関して了解されるのもこれ故である。交通する外部の身体や物財が都市という定住に配列される時、そこにはそれらの身体や物財を特定の土地空間に関して再内部化する機制が作動している。

都市＝二次的定住において、人々は他者と出会い、「共同体」的な社会を超えた広がりや複雑さをもった「社会」に触れる。柄谷行人が述べるように「共同体」と「社会」とを分かちものが他者との交通の有無であるとすれば、都市とはまさに「社会」が露呈する空間である(→柄谷[1986])。都市と都市のある社会の成立によって、一次的定住の外部での身体や物財の関係の露呈する時、通常言う意味での「経済」や「政治」は顕在化する。ヴェーバーの都市概念の検討が「経済」と「政治」を二本の柱としたのは、一つの必然である。

V. 見えない都市、あるいは〈近代〉

【1】ところで、『見えない都市』の終末近くで、マルコ・ポーロは次のような奇妙な都市達について語っている。一つの都市でありながら世界中を覆い尽くす都市トルーデ、地理的な空間の秩序が解体し、都市の内部・外部の空間が混ぜこぜになった都市チェチリア、内部と外部の空間的な区画を失い、何人もけっしてその外へは出られない都市ペンテシレア(Calvino[1972=1977: 175-176; 205-208; 212-215])。これらの都市は、都市がそれとの反照関係において社会的同一性を得る一次的定住を徹底的に欠いている点で、まさに「見えない都市」と呼ばれるに相応しい。それは、われわれの近代に出現した「一夜出来の現代的な大工業都市」(マルクス＝エンゲルス)やメガロポリスに酷似している。

詳細な考察は別稿に譲らざるをえないが、最後に、この〈近代〉という社会に現れた「見えない都市」の存立機制を概観して、本稿を終わることにしよう。

【2】〈近代〉とは如何なる社会か。

ポランニーは、近代社会を、市場による交換が他の統合形態に対して優越する社会であると捉えていた。既に引用したように、「近代において、市場が経済のなかの支配的な力へと擡頭したことは、土地と食料が交換をとおして移動し、労働が市場で売買されるべき商品に転じた度合に注目することによってたどることができる」(Polanyi [1977=1980:101]) のである。

他方ドゥルーズ＝ガタリは、近代社会を貫く機制を、〈資本主義〉という言葉で表現している。彼らによれば、〈資本主義〉とは、脱コード化され脱土地化された労働力の流れ(＝交通)が、不変資本としての技術機械に下屬し、接続し、運動するシステムである⁽¹²⁾。そしてそこでは、国家もまた、社会空間を中心化する原初

的な国家とは異なり、資本主義の運動に内在化して、それらの交通を制御する機能としての国家、ドゥルーズ＝ガタリが「資本主義《国家》」と呼ぶ国家へと移行する(→ Deleuze & Guattari[1972=1986])。

〈近代〉という社会は、大略、社会空間の編成の様態のこのような変容の中で成立していった。市場や国家といった先行的な社会形式は、この変容と共振し、かつ自らをその中で変容させてゆくだろう。

【3】近代社会、そして近代的な都市の成立に関して、マルクス＝エンゲルスは、マニュファクチュアを支える「機械」を核とした技術体系に、中世的な都市共同体——既に特定の制度・技術によって内部化された外部としての「都市＋共同体！」——に対するもう一つの外部性の領域を可能にするものを、見出していた。

機械は概してほとんど技倆を要せず、無数の部門に細分されることも容易な労働であったので、その性質全体からして同業組合の桎梏とは相容れなかった。それゆえにまた機械はたいていは村や市場町において同業組合組織なしに営まれたが、これらの村や市場はしだいに都市に、しかもまたたくまにそれぞれの国の最も繁昌する都市になった。(Marx & Engels [1958=1965:105-106])

このような機械を核とするシステムこそ、古典的な〈資本主義〉に他ならない。技術としての機械に支えられた〈資本主義〉は、個々の社会の風土的・自然的な固有性や、伝統的な規範・慣習を排除して人々や物財が交通する〈世界歴史〉の空間を生み出していった。中世的な「自然発生的都市」にかわる「一夜出来の現代的大工業都市」は、このような空間の中から生まれ

てきたのである(→ Marx & Engels [1958=1965:113-114])。

マルクス＝エンゲルスが近代社会と近代都市の成立に見ていたのは、「機械」を核とした組織原理である〈資本主義〉とともに、土着的な規範の支配から逃れた新たな「外部」の空間が現れ、身体や物財がそこに再属領化(=再土地化)されていく様であった。

【4】ここには、〈都〉や〈市〉と通底しつつ、それらとは異なる「外部」が露呈している。この新たに露呈した「外部」の空間を、さしあたり〈資本制空間〉と呼んでおこう。〈資本制空間〉、それは身体や物財の社会的交通が、資本主義の運動原理によって制御されてゆく空間である。

見えない都市、一次的定住なき二次的定住としての都市の出現は、社会的な交通を社会体に全域化するような制度・技術の体系としての〈資本主義〉が、〈都〉や〈市〉の位相と通底しつつ人々や物財の交通を捉えていったことにより、社会の全域を「内部なき外部」とする〈資本制空間〉が広がってゆくという、近代の社会空間の位相的な変容に対応している。〈近代〉という社会は、社会の全域が二次的定住するような、都市＝二次的定住の極北に現れるのだ⁽¹³⁾。

かくして「都市＝二次的定住・論」の射程は、「王なき、商人なき都市」である近代都市と、そのような都市＝外部を全域化する傾動をもった「都市のある社会」としての近代にまで及ぶことになる。近代、そして現代が、その極限において「社会の完全な都市化」(→ Lefebvre [1970=1974:9])を目指すとするれば、「都市＝二次的定住論」は、その極限においてそれらの「見えない都市」の存立機制と対峙するのである。

注

- (1) 「深度」という概念を、われわれはスペンサー＝ブラウンの算法における「深度 depth」の概念のアナロジーとして用いている(→ Spencer-Brown [1969=1987:7-8])。もっともわれわれは、この概念をスペンサー＝ブラウンに負うというよりも、その社会学的解題である大澤真幸の著作によっている(→大澤[1988:39-40])。本稿の議論は多くの部分で、大澤氏の著作ならびに氏との直接の議論に触発されている。記して感謝の意を表したい。
- (2) けれども、「共同体」とは何なのか。共同体的な社会を一つの自明性として導入し、そこからの逸脱として「都市」を語る時、われわれは、「声」と「文字」との相違についてのルソー的な解釈にデリダが見たのと同型の、「直接性／間接性」に関する倒錯に内属しているのではないか(→ Derrida [1967=1972])。文化人類学的な思考の教えるところによれば、「共同体」というのもまた、一つの社会が自らを、あるいは他の社会を語るところに見出される「フィクション」なのである。以下でわれわれが、「共同体」とカギ括弧に括った表記をしばしば行うのは、通常「共同体」と呼ばれる存在が自らもつ間接性を指示したかったがためである。
(「共同体」のフィクション性に関しては、国立民族学博物館の大塚和夫氏から御教示頂いた。氏の御教示は本稿の全体的な構想にも関わるものであり、ここで深く感謝の意を表したい。)
- (3) 「都市／村落」という図式には、既にそれに先行して「移動／定住」という図式が前提とされている。が、後述の議論に見られるように「都市」と呼ばれる定住が社会的交通の定住による内部化によって成立していることは、都市という存在においては移動性と定住性が媒介され、通底することを暗示している。このことに関しては、本稿IVを参照せよ。
- (4) けれども、ある言葉と別の言葉が同義であるとは如何なることか。とりわけ相互に異なる言語体系に属する言葉が「翻訳」として同義であるという場合に、それらが本当に同義であるとは如何なる事態を意味しているのか。「翻訳」が可能である時、そこには言葉や振舞の配列を支える社会的な関係や構造の同型性が看取ないし仮定されている。われわれが本稿で「社会性」と呼んでいるものも、ある種の社会状態を支える機制や構造の同型性のことである。
- (5) ヴェーバーの「オイコス」概念については、Weber [1921 → 1956=1964:9;54]の注4、注3を参照。
- (6) たとえば、倉沢 [1984:39-41]。
- (7) ヴェーバーの「ゲマインデ」概念については、Weber [1921 → 1956=1964:27]の注2を参照。
- (8) ここで「生態的」というのは、都市社会学が言うような「人間生態学」的という意味ではなく、自然史的な意味で用いられている。
- (9) 「社会的な変容 (=社会変容)」の概念を、ここでは内田隆三 [1987] が提起した意味で、即ち、これまで「社会変動」の概念によって指示されていたのとは異なり、社会的な現実性の場の変容、社会システムの成立平面をなす基本的な実定性の形態の変化の記述を目指す意味で用いている(→内田 [1987:v])。
- (10) けれども、〈都〉と〈市〉とは単に逆立する関係にあるのではない。それらは、都市の歴史的にきわめて古い段階から今日にいたるまで、相互に通底する関係にもある。このことについては、若林 [1989] を参照。
- (11) たとえばホィートリーは、古代帝国における都市化と国家に関して、両者を同一の社会過程の空間的規模を異にする現象であるとしている。一般に、都市化とそれを含む社会の大域的な変容とは密接に相関しており、ホィートリーは前者、即ち都市的定住人口の増加を“urbanization”と、後者の都市化に相関する社会の大域的な変容を “urban

- process”と呼んで区別することを提唱している。
 (→ Wheatley[1983])。
 (12) 〈資本主義〉の類似の把握は、橋爪大三郎によってもなされている(→橋爪[1986→1986])。
 (13) このような社会では、「一次的定住/二次的定

住」の間の差異は、空間的な差異であると同時に時間的な差異として、即ち一次的定住を「過去」とし、二次的定住を「現在」ないし「未来」とするような構造をもつことになるだろう。このような構造については、さしあたり吉見[1987]を参照。

文献

- Braudel, Fernand 1979 *Les Structures du Quotidien: Le Possible et L'Impossible: Civilization Matérielle, Economie et Capitalisme, XV^e- XVIII^e Siècle tome I*, Armand Colin.=1985 村上光彦訳、『日常性の構造2 —物質文明・経済・資本主義 15-18世紀 I-2』、みすず書房。
- Calvino, Italo 1972 *Le Città Invisibili*, Giulio Einaudi editore s. p. a.=1977 米川良夫訳、『マルコ・ポーロの见えない都市』、河出書房新社。
- Clastres, Pierre 1974 *La société contre l'Etat*, Minuit.=1987 渡辺公三訳、『国家に抗する社会』、書肆風の薔薇。
- Deleuze Gilles & Guattari, Felix 1972 *L'Anti OEdipe: Capitalisme et Schizophrénie*, Minuit.=1986 市倉宏祐訳、『アンチ・オイディプス』、河出書房新社。
- Derrida, Jacques 1967 *De la grammatologie*, Minuit.=1972 足立和浩訳、『根源の彼方に —グラマトロジーについて—』(上)(下)、現代思潮社。
- 橋爪大三郎 1986 「来るべき機械主義」、『別冊文藝 現代思想の饗宴 (the Bungei Critics 1)』:188-193。→ 1986 『仏教の言説戦略』:251-264。
- 柄谷 行人 1986 『探究 I』、講談社。
- 倉 沢 進 1984 「都市社会学の基礎概念」、鈴木広・倉沢進(編)、『都市社会学』:35-56、アカデミア出版会。
- Lefebvre, Henri 1970 *La révolution urbaine*, Gallimard.=1974 今井成美訳、『都市革命』、晶文社。
- Marx, Karl 1867 *Das Kapital I*,=1969 向坂逸郎訳、『資本論(一)』(岩波文庫版)、岩波書店。
- Marx, Karl & Engels, Friedrich 1958 *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 3, Dietz.=1965 真下信一訳、『ドイツ・イデオロギー』(国民文庫版)、大月書店。
- 大澤 真幸 1988 『行為の代数学 —スペンサー=ブラウンから社会システム論へ—』、青土社。
- Polanyi, Karl 1977 *The Livelihood of Man*, Academic Press.=1980 玉野井芳郎・栗本慎一郎訳、『人間の経済 I』、岩波書店。
- Spencer-Brown, G. 1969 *Laws of Form*, George Allen and Unwin, London =1987 山口昌哉監修、大澤真幸・宮台真司訳、『形式の法則』、朝日出版社。
- 内田 隆三 1987 『消費社会と権力』、岩波書店。
- 若林 幹夫 1988a 「都市と社会 —外部の内部化—」、『創文』No.289:10-13。
 ——— 1988b 「都と市 —都市の〈起源〉をめぐって—」(未発表)。
 ——— 1989 「古代・中世日本における都市化の諸相 —比較社会学的考察—」、『比較都市史研究』8-1:13-27。
- Weber, Max 1921 "Die Stadt: eine soziologische Untersuchung", *Archiv für Sozialwissenschaft und*

Sozialpolitik, Bd.47. → 1956 *Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der verstehenden Soziologie*:735-822, 4 neu herausgegebene Aufl., besorgt v. J. Winckelmann, Tübingen.=1964
世良晃志郎訳、『都市の類型学』、創文社。

Wheatley, Paul 1983 *Nāgara and Commandery*, The University of Chicago.

吉見 俊哉 1987 『都市のドラマトゥルギー——東京・盛り場の社会史——』、弘文堂。

(わかばやし みきお)